

Johannes van Oort: *Jerusalem and Babylon,  
A Study into Augustine's City of God  
and the Sources of his Doctrine of the Two Cities*

E. J. Brill, Leiden/New York/Koebenhavn/Koeln, 1991, ix+427 p.

中 川 純 男

本書は G. Quispel の下に提出された博士論文であり、1986年にオランダ語で出版された版の英訳である。大きく分けて二つの論点を有している。一つは『神の国』という膨大な著作の性格を明らかにすること、もう一つは『神の国』の主題である二つの国の対立という考え方の歴史的な源泉を解明することである。それぞれ本書の第三章「アポロギアとしての『神の国』とカテケシス」、および第四章「アウグスティヌスにおける二つの国という考えの源泉」で論じられている。全五章からなる本書の第一章は「序」、第二章「アウグスティヌスと『神の国』」は上述の二つの論点に関わる従来の研究の検討、第五章は「結論」に当てられている。

まずこの二つの論点をめぐる著者の主張を要約しておこう。『神の国』はどのような性格の著作であると特長づけることができるか。著者は次のような認識から出発する。アウグスティヌスは『神の国』の執筆動機について第一巻および『再考録』でローマの攻略されたことを挙げている。しかし、この事件は第一巻を除くと、ほとんど触れられていない。したがってローマが攻略されたことは、『神の国』執筆の一つの契機ではあったとしても、著作誕生の主要な理由であるとは考えられない (p. 87)。『神の国』において、アウグスティヌスは異教徒を反駁する。この意味で『神の国』は、従来、アポロギアと呼ばれる著作形態に連なると見なされてきた。そしてこのような性格づけにおいて、『神の国』第二部を中心とするキリスト教の教義の積極的な説明という側面は十分に注目されてこなかった (p. 89)。しかし、アポロギアは歴史的にも、異教の反駁にとどまらず、キリスト教の教義の積極的な主張を含んでいたことを忘れてはならない (p. 168)。ではアウグスティヌスはどのような相手に向かって教義を説得しようとしているのであろうか。このことを考える上で重要なのは、*De catechizandis rudibus* との内容の共通性である。歴史を七つの時代に区分し、神の

国、地上の国が対立しながらこの歴史をたどるというカテケシスの話の内容は『神の国』の構想と共通している。『神の国』はカテケシスの書という性格を有しているのであり、カテケシスの書としての『神の国』が向けられているのはウォルシアヌスのように、キリスト教に対して批判的な問いを発しつつ、他方で、キリスト教の信仰によって教えられることを望んでいる異教徒である (p. 195)。このように著者は主張する。

二つの国という考え方がアウグスティヌスの独創でないことは、*De catechizandis rudibus* における記述からも知られると指摘する著者は、第二の論点、すなわち、アウグスティヌスにおける二つの国という思想の源泉を解明するにあたって、まずアウグスティヌスにおけるこの思想の特色を確定する。第三章の探求で明らかにされたカテケシスとしての性格の他に、アウグスティヌスにおける「二つの国」の思想の特色として挙げられるのは、第一に、この二つの国の区別が絶対的であるということである。たしかに現在二つの国は混ざり合っているが、両者の中間に位置する第三の国といったものは考えられていない。この点で Markus の主張する *saeculum* という考えは批判される。さらに、この二つの国はいずれも天使と人間とからなり、それぞれに歴史があるということ、一方の支配者はキリストであり、他方はサタンであるとされていること、二つの国という思想の聖書的根拠が『詩編』に求められていることもアウグスティヌスにおける「二つの国」の思想の特色である。これらの特色を手がかりに、先行する思想からの影響が検討される。その検討は周到であるが、要約すれば次の通りである。Alfaric 以来指摘されているようにアウグスティヌスの二元論的発想がマニ教ときわめて類似していることは事実である。しかし、アウグスティヌスが意識的にマニ教の教義を取り入れたとは考えられない。無意識的な影響を論ずる前に、まずマニ教以外に影響を及ぼした思想がないかを考えるべきである (p. 234)。ドナティスト派ティコニウスから影響されたとの主張がある。アウグスティヌスがティコニウスを知っており、二つの国の思想においてティコニウスと共通する点があることは確かであるが、ティコニウスから二つの国という考え方を受け取ったと考えるのは困難である。アウグスティヌスは二つの国という考え方がティコニウスに固有のものとは考えていないからである (p. 274)。アウグスティヌスにもっとも近い形で二つの国という考え方を述べているのはアンブロシウスである (p. 278)。ただし、アンブロシウスにおいて二つの国は魂のあり方であり、したがって歴史を持たないという点がア

ウグスティヌスと異なっている。Altner が指摘するオリゲネスもこの点ではアンブロシウスと共通する。二つの国について明確に語ってはいないが、この世に対する否定的な態度において、キリスト教徒はこの世を旅する天上のイエルサレムの市民であるという理解において、ウグスティヌスに近いのはテルトゥリアヌスである (p. 299)。その反ローマ的態度を復活させたのがドナティスト派であることを考えるなら、地上の国と神の国とを鋭く対比するのはアフリカのキリスト教に特徴的な発想ではなかったかと推測される。二つの国の対立という発想は、ユダヤ教の影響の強い文書に際込られている (p. 321)。ウグスティヌスがその中にいたアフリカのキリスト教はユダヤ教の影響を多くとどめたキリスト教であったと考えられる。ウグスティヌスとマニ教との類似は、近年の研究が明らかにしているように、マニ自身がユダヤ的キリスト教の影響を受けているためである。このように著者は結論する。

ウグスティヌスに影響を及ぼした思想として単一の思想家を特定することを明確に避け、思想的伝統の中にウグスティヌスを位置づけようとする方法は著者の基本的な姿勢であり、その方法の正当性は本書が立証するところであるが、第一の論点について、われわれは次のことを指摘しなければならない。『神の国』において「ローマの攻略」という事件が、直接言及されている箇所がそれほど多くないことは事実であるが、しかしこのことからただちに、この著作の真の成立理由は他にあると結論することはできない。なぜなら、執筆動機としてウグスティヌスが挙げているのは、410年の事件そのものではなく、このことを契機として起こったキリスト教に対する中傷だからである (*Retr.*)。すなわち、「キリスト教の時代になり、ローマ伝来の神々への礼拝を怠ったから、神々はローマを護ってくれなかった」という非難に答えることがこの書の目的とされているのである。そして真実の神への *cultus* (礼拝、敬虔) と偽りの神々への *cultus* を論じているという点で本書の内容は一貫しているからである。しかしもちろん、執筆の動機が単一であると見なす必然性はない。さまざま動機が複合的に働いて一つの著作を生み出すと考える方がむしろ合理的であるかもしれない。事実ウグスティヌスもキリスト教への中傷に答えることが、同時にマルケリヌスに対する約束を果たすことにもなると述べているからである (*De civ. dei* I, pr.)。書簡からも知られるように、その約束の内にウォルシアヌスにキリスト教を教えるということも含まれていたであろうことは当然推測される。『神の国』はマルケリヌスに宛てて書き始められた。しかし、『神の国』執筆後まもなくマルケリヌスは亡くな

っている。アウグスティヌスはどのような読者を念頭において、『神の国』の執筆を続けたのか、この著作の性格が問題となる理由はここにある。ウォルシアヌスのようなキリスト教に関心を持つ異教徒を読者として想定しつつアウグスティヌスは『神の国』の執筆を続けたのか、Van Oort がその立論の根拠とする *De catechizandis rudibus* の内容との共通性は事実であるが、それは『神の国』の構成の枠組が *De catechizandis rudibus* に述べられていることと共通しているということであって、『神の国』の実質的な内容をなす、さまざまな話題は『神の国』独自のものである。

『神の国』を、*De catechizandis rudibus* におけるのと同じ意味でのカテケシスと見なすことは困難である。さらにまた『神の国』をアポロギアと性格づけるにあっても、われわれは慎重でなければならない。アポロギアという規定の原点となった二世紀の著作は、いずれもギリシア的世界の知識層を相手にキリスト教を弁明するという形をとった著作であった (cf. Harnack, A. v. *Lehrbuch der Dogmengeschichte* I, p. 497)。アポロギアという名が与えられたのもそのためである。しかし、『神の国』において、反駁すべき相手であるキリスト教を中傷している人々は二人称で呼びかけられてはいない。キリスト教に対する敵対者たちの主張は「彼ら」の主張として語られ、しかもその論理の可能性はアウグスティヌス自身によって独自に展開させられている。「彼ら」の中傷に対する直接的な対応がアウグスティヌスの意図するところではなかったことは明らかである。アポロギアと呼ばれる二世紀の著作と『神の国』を比較するとき、もう一つ、重要な相違がある。アウグスティヌスがこの著作において弁護するのはキリスト教 (*religio christiana, tempora christiana*) ではなく、まさに「神の国」であるということである。地上においてはいまだ完成を見ない「神の国」をアウグスティヌスは弁護しようとしているのである。ここにわれわれの指摘しなければならない、もう一つの問題がある。二つの国は、現在、混ざり合って存在しているにもかかわらず、原理的には歴然と区別されているとアウグスティヌスは考えている。このことに関する Van Oort の指摘は正しい。しかし、その原理的区別を「終末論的」という概念で説明するとき (p. 153)、一つの問題が覆い隠されている。二つの国の原理的区別は、現在においても明確に区別される二種類の愛により説明されていることをわれわれは指摘しなければならない (cf. *De catech. rud.* 19, 31. *De civ. dei* XVIII, 28)。二つの国の絶対的対立 (*controversial antithesis*) をアウグスティヌスにおける二つの国の思想の特色として繰り返し強調する Van Oort は、それにもかか

ならず、この対立の原理である二つの愛については何も述べていない。この点の欠落は先行する思想から影響を指摘するにおいてもある種の偏りをもたらしている。魂の内に二つの国の対立を見る点でアンブロシウスはアウグスティヌスと相違するとされ、また二つの国という考え方に関する限りプラトニズムからの影響はないと断言されているからである (Chap. 4, B)。「二つの国は、肉体においては混ざり合っているが、意志においては区別されている (cf. *De catech. rud.* 19, 31)」ということばを読むとき、そこにプラトニズムの影響を認めないことはむしろ不自然である。歴史の原理そのものが、歴史的でないのは当然である。

---

Dermot Moran:

*The philosophy of John Scottus Eriugena.*  
*A study of idealism in the middle ages,*

Cambridge University Press, Cambridge, 1989, pp. XVIII+333.

R. L. シロニス

本書は、その副題が暗示しているように、エリウゲナの思想を十九世紀の観念論の観点から解釈したものである。著者は本書により、今世紀になってますます関心が持たれるようになってきたエリウゲナの思想の現代的意義を示そうとしている。

著者は前書きで、ポエティウスとアンセルムスとの間の橋渡しの役を果たすエリウゲナの思想の研究が、中世後半の思想を理解するために必要であるが、まだ十分に研究されていないと述べ、その思想を想像的・思弁的体系として特徴づけ、またギリシアのプラトン主義者の教父の神秘的な考えとラテンの思想家の論理的な考えを総合する体系として特徴づける。著者はさらに、エリウゲナの思想の中で、時代に先がけて近代思想と同じことを説く点をいくつか吟味し、彼の思想を観念論的思想として解釈すべきであると主張する。その観念論的点とは、著者によると、エリウゲナの思想の中で存在と同様に重要なものとしての非存在の強調であり、「コギト」と内面性の重視であり、そして特に主体・主観への転換である。

著者はエリウゲナの思想の中に實在論的・存在論的な要素もいろいろ見いだされる